

明石の史跡（84）拳うち



拳（こぶし）とは、「五指を折りまげてにぎり固めた手先」の称で、にぎりこぶし、げんこつ、などといわれる。（日本語表現辞典）

天正10年（1582）頃、武田氏を滅ぼした家康は、凱旋の帰途、安倍川のほとりで、大きな釜（直径4尺・深さ3尺7寸）に遭遇。これを浜松城に運ぼうとしたところ、本多作左衛門重次が、鉄槌で持って破壊したことは、鬼作左の面目を発揮した話としてつたえられている（磯田道史著『殿様の通信簿』228－9頁）。それから一世紀余の後、明石藩には、鉄槌ならぬ、拳でもって釘打ちした藩士が存在した。

明石藩士伊藤五郎右衛門は、その姿は人並みはずれてたくましく、その心も強い人物であった。ある時、大慈公（八代藩主松平直明）は松竹堂に入って、掛け物を壁にかけようとして、釘を打ちつけようとしたところ、鉄槌（鉄製の大形のかなづち）を持ち合わせてなく、侍臣に、金槌に代わるものとして、石やあれこれを命ずるうちに、五郎右衛門がかかわりあうことになり、握った拳でもって、釘を打ち出した。なにさま相手は、鉄製の釘ゆえ、当然のことながら、拳の皮は裂け、流血の事態となる。委細かまわず掛け物をかけるための釘打ちを続行。このような性格の男なので、大慈公の思し召しもよかった。

ただ、この五郎右衛門には、次のような後日談が残されている。「釘打ち」ののち、元禄16年（1703）6月晦日朝、大慈公が野原に出かけようとして、二の丸御殿の玄関口へ回ったところ、お供の五郎右衛門が、草鞋をはいているのを確認した。つぎの瞬間、その背後から、名乗りをあげた森幸之丞（児小姓）に切りつけられ、落命。原因は、男色（なんしょく）にからむトラブルであったという（「東播秘談」『講座明石城史』533頁）。